論　考

會館で神を祭祀する意義とその對象

―北京の士人會館を中心に

張　九　龍

はじめに

明清社會において會館組織が重要な役割を果たしてきたことは言うまでもない。しかし、會館組織に關する宗教的研究が少ないように思われる。そこで、本稿は會館組織の原點である北京の會館組織を取り上げ、その宗教的側面について考察したい。

なぜ人々が神を祭祀するのか、また會館での神の祭祀にはどのような意義があるのか、という問いに焦點を當て、本稿は明清時代の會館組織における祭祀問題について檢討したい。一方で、祭祀活動は社會全體に浸透しており、その全體像を明らかにすることは困難である。中國では、國家體制を維持するために、皇帝自らが行う祭祀から、府・州・縣の官僚が行う祭祀、さらには個々の家庭内で行われる祭祀まで、至るところで祭祀活動が行われている。また、祭祀の對象も様々で、儒教、佛教、道教の宗教神だけでなく、歴史人物を神格化したもの（關羽など）も存在している。從って、本稿は北京にある會館の中でも特に士人會館を取り上げ、會館で神を祭祀する意義とその對象について考察したい。

一、會館で神を祭祀する意義について

會館の中で幅廣く様々な神を祭祀しているのは、會館組織の構成員が異なっているからである。田仲一成氏によれば、北京の會館組織は、士人會館・商人會館・工人會館の三つに分類することができると述べている。[1] 從って、組織の性質や機能・目的が異なれば、會館で祭祀する神も異なる。例えば、士人會館は主に城隍神・土地神・文昌神などを祭祀していることに對して、商業會館や工人會館の場合は、自分の職業と關係している神（金・銀業は財神、油業は火神）を祭祀するのが一般的である。また、田仲氏によれば、祭祀自體が、士人會館は季節祭（春祭・秋祭といった季節の節目）を重んずることに對して、商人會館は神誕日祭（神の誕生日とされる日）を重んじているのが特徴である。[2] そして、商人會館や工人會館の構成員は同じ職種の人に限定されるが、士人會館は官僚・商人・科擧士子などの身分を問わず、同鄕人であれば加入することができるため、その構成員はかなり複雜である。そのため、士人會館で祭祀されている神も他の會館より多種多様である。

會館における祭祀する意義を述べる前に、まず、一般的な祭祀についてまとめておきたい。そもそも祭祀というのは人間が自然災害や生老病死の様な人爲的に變えられないことに對して、神に祈り、心の慰めを求めることから由來すると考えられている。[3] 本來なら、祭祀する對象は自然神だが、國家や社會・文化などの形成過程で、祭祀すること自體も多様な色彩を帶びるようになっていく。一方で、明清時代の會館における祭祀はこの様な宗教や文化のみならず、國家體制による影響も深かった。更に、上述の様に會館組織の構成員が異なるため、祭祀する對象も異なる。總じて言えば、會館で神を祭祀する意義として、秩序を保つ・結束を高める・親睦を深める、の三點に歸結することができる。以下、この三點について史料や資料を用いて詳しく考察したい。

まず、會館を運營・維持する爲には秩序が必要である。會館によっては異なる場合もあるが、必ず規則が設けら

れている。しかし、時代が變遷する中でその時の實狀も變化するため、會館を運營する際には必要に應じて規則を新たに制定したり、元の規則を修正したりすることがある。ここでは、北京にある歙縣會館[4]を取り上げ、その規則を分析することで、會館で神を祭祀する意義を明らかにしたい。歙縣會館の場合は、乾隆（二回）・嘉慶（二回）・道光（一回）の計五回にわたって、規則を制定・增訂したが[5]、中には一貫して變わらない規則もある。それは、會館を運營するためのお金の徵收や管理、會館を利用する際の注意事項や年中行事などの決まり事である。特にお金の徵收と管理には細かな規則が制定されており、問題が發生した場合にはそれに伴う罰則も制定されている。例えば、歙縣會館の乾隆六年に制定した條規は以下の樣に記す。

一　樂輸銀兩、將前已附及後續收者、皆登載明白、司年之人、不得濫行開銷花費、每年擇日、公同結算、有私支未清者、鳴衆公罰[6]。

樂輸の銀は、前に既に徵收したものと後に收めた者を、明確に登載して、司年の人は、濫行に使用してはいけない、毎年に日を選び、共同で決算し、私用して清算してない者は、周知したうえで罰する。

以上の條規について詳しく分析したい。まず、「樂輸」というのは、會館組織に在籍する同鄕人が組織運營のために出す援助金のことである。ちなみに、歙縣會館は主に同鄕の官僚と商人によって構成され、組織の運營資金も全て同鄕人間による援助で賄っている[7]。そのため、「樂輸」によって集められたお金は組織の收入として帳簿に明記して、嚴重に保管することが必要とされた。その帳簿を管理するのは「司年」である。「司年」は會館の收支簿だけではなく、宿泊者の管理や年中行事など、會館運營の全般を任されており、權限を持っている存在である。しかし、權力とお金を委ねることで、不正が生じやすいのも容易に想像できるだろう。そこで、管理人を一年或いは二年ごとに交代する規定を設け、權力の集

中と不正を防ごうと考えた。會館によって異なるが、一年ごとに交代する會館が多いため、その年の管理人を「司年」或いは「値年」と呼ぶようになった。歙縣會館では、毎年北京在住の裕福かつ店舗を持っている人を二人選び、交代で「司年」を充て、交代する際には、契約書類やお金の收支狀況を記す帳簿を互いにしっかりと確認した上で行う[8]のが慣例である。他の會館では「司年」を一人しか設けないが、歙縣會館の場合は二人交替で管理していることからより嚴しいルールが制定されているのが窺える。

以上、歙縣會館の規則をもとに會館運營上の規則の重要さについて考察した。歙縣會館錄には、「司年」の具體的な選出方法について記されていないが、他の會館記錄では、年始の祭祀を終えた後に行われるのが多く見受けられる。例えば、北京績溪會館では、正月十三日の祭祀[9]が行われる日に館事をくじ引き形式で選定し、交代する際に帳簿を清算し、その明細を壁に貼り附けて開示することが規定されている[10]。また、涇縣會館も、毎年二月三日の文昌誕生の日に、在京の同鄕を集め、新たな値年を選定することが規定されている[11]。この様に、神を祭祀する場で行事を行うのが秩序を維持する有效な手段だと考えられている。

次に、神を祀ることによって、同鄕人間の結束を高めることができる。會館の中で最も多く祭祀されているのは城隍神と土地神である。城隍神と土地神の由來や遷移については後ほど詳しく述べるが、ここでは何故この二つの神が多く祭祀されているのかについて論じたい。明清時代になると、土地神は個々の家や村の守護神として定着し、民衆にとって最も身近な存在となった。それに對して、城隍神はより廣い範圍を治める神として、言わば土地神の上官に當たる存在であった。そして、土地神と城隍神は其々管轄する區域が決まっており、その區域を超えると神の效力は弱まるが、場合によっては完全に神力が失われると言われている。神の管轄區域というのは、中國の行政區域と同じく、都・府・州・縣ごとに、都には都城隍神を、府には府城隍神が置かれている。そ

ここで、北京にある會館では、各地域の出身地の城隍神と土地神を祀ることで、その效力を保とうと考えたのである。從って、會館の中で出身地の神を祀ることで、會館という空間を北京にある地元神の出張所の様な存在として作り上げた。そこで、同鄉人が會館で年中行事や會議・事務・宴會などを行うのは、地元の神廟で行うのと同様の效果があり、不正を行えば神に裁かれると考えられていた。この様に、會館で地元神を祀ることによって、同鄉人間の結束を高めることができると考えられる。

最後に、神を祭祀した後に宴會を開くことで同鄉人間の親睦を深めることができる。會館では毎年の年末年始や節ごとに必ず揃って神を祀り、その後に宴會を開くのが定例である。例えば、福建の龍溪會館では、毎年一月十五日、一同にお金を出し合い、先賢を祀り、その後に食事をすることとなっている。また、その日に一年間の收支を壁に貼り附け、無私であることを開示し、管理人が交代する場合も同じ日に行うと決まっている。[12] 同じく福建の漳郡會館では、上元と中秋の日に漳郡城隍神を祀るが、館長と副館長が必要な供え物を購入し、同鄉人に知らせ、當日になると館長自ら祭祀を司り、祭祀を終えると宴會が開かれることになっている。[13] この様に、神を祀ることで結束が再確認され、その後の宴會では笑談しながら、同鄉の情を語り合うことで、一層同鄉人としての絆が深まる。

ここで、特に士人會館に見られる最も盛大な宴會である科擧試驗の合格者を祝う會について簡單に紹介したい。科擧試驗を合格した同鄉人がいる場合、會館に招き入れ盛大な懇親會を行うことが士人會館での一大行事である。[14] 特に、進士に合格すればより盛大な宴會が開かれ、同鄉人だけではなく、關係する官僚から庶民まで、多くの人々が招待される。この様に、會館で科擧試驗合格者を祝うことが、明清時代の進士身分の上昇や科擧制度と會館組織の關係に深く關わっていて、このことに關しては稿を改めたい。いずれにしろ、會館で科擧試驗合格者を祝うことは、同鄉人の親睦を深める效果があると考えられる。

以上、會館で神を祭祀する意義について述べた。士人會館は同鄕人が主體として、その結束を束ねるには一定の規則が必要であることは既に前述の如きである。しかし、規則だけで會館組織を運營・維持するのは難しいため、神の力を借りた。神の力が發揮できた理由として、主に時代變遷とシンクレティズムの二點が擧げられる。まず、時代變遷とは、唐宋變革のことである。特に、宋代の商業化と都市化の擴大や宗敎の民衆化によって、儒敎・佛敎・道敎が民間の中で融合され、次第に流動的・多變的な民衆信仰へと發展した。かつて民衆の生活から遠く離れ、虛無的な存在である神が次第に民衆の需要に應え、民衆の切實な生活の中で生きる樣になり、個性豐かな神々が民間社會の中で誕生した。こうした中で、明代社會においては、特に城隍神は樣々な性格や機能が加わり、國家から庶民まで全國の至る所で祭祀されるようになった。會館の中で城隍神を祀ることもこの樣な社會背景に根差している。

次に、シンクレティズムとは、先秦時代から行われてきた神判[16]と佛敎・道敎との習合である。元々神判というのは、事案が錯綜して裁けない時に、關係者（原告と被告など）を祠廟に連れ込み、神の示現を仰いで、犯罪の有無や事實の眞僞を判定する手段であったが、佛敎由來の十王信仰が民間の中で廣まると、神判も冥界諸神の職能として取り込まれた。明代になると、因果應報や勸善懲惡の思想が大いに流行する中、人々にとって最も近しい存在である城隍神や土地神に次第に人間の行い（善行・惡行）を監視する役割が加わった。その具體的なプロセスについて、簡單に說明しておきたい。土地神は一家（核家族）の善惡を常に記錄し、人が亡くなるとその魂がまず土地神の所に行く。その後、城隍神の使者である牛頭・馬面がその魂と善惡簿と共に城隍神の前に連れて行き、城隍神自ら相違のないことを確認し、魂を地獄十王に引き渡す。十王はその人の世々の善惡を量り、輪廻轉生する樣に裁く。この樣に、土地神と城隍神は常に人間の善惡を監視・記錄し、惡行した人は人間を騙していても、神を騙すことができないので、案件の眞僞を判

圖1. 會神訊案
『點石齋畫報』第十三集・上（上海文藝出版社、1998年）2383頁より。

定するのみならず、人間の行い自體を是正する效果もあった。

以上の様に、會館の中で地方の城隍神や土地神を祀ることで、北京にいる地方出身者を監視することを可能にした。そこに集まっている同鄉人は地元神の監視下にあることから、同鄉人としての秩序が保たれ、結束を高めることが出來たと考えられている。一方で、やましいことや不正を行うと、當然神から罰を與えられる。この様に、會館で神を祀ることは會館組織を運營・維持するために非常に重要な役割を果たしているのが窺える。

二、祭祀する對象

本節は、北京にある士人會館でよく祀られている神々について考察したい。總じて言えば、士人會館では大きく二種類の神が祀られている。一つは、主に道教に屬する神々であり、もう一つは、會館の創立者や鄉賢などの實在人物である。ここで、士人會館の中でよく祀られている道教に屬する神として、城隍神・土地神・文昌帝君

の三つを選び、其々の神の形成過程を紹介した後、會館での祭祀狀況について考察したい。また、人物神としては、特に會館の創立者を取り上げて考察したい。なお、本節は主に『閩中會舘志』[16]に所載の福建各會館を取り上げ、具體的な祭祀活動について考察したい。

前述の様に、北京では士人會館以外に商人會館と工人會館もある。ここで、まず商工業會館の祭祀對象について紹介しておきたい。商工業會館では、商賣繁盛を祈念するために神を祭祀しているが、特に增福財神・正一玄壇趙元帥・關羽の三つの財神がよく祀られている。『萬曆續道藏』所收の『搜神記』によれば、增福財神は李詭祖といい、魏の文帝（二二〇～二二六年在位）の時に活躍していた人物で、特に官僚や民衆の衣・食・俸給を司る神とされており、唐の明宗天成元年（九二六）に增福相公として封じられた。[17]一方で、正一玄壇趙元帥については諸説あるが、『三教源流搜神大全』によれば、趙元帥の姓は趙で、諱は公明、鐘南山の人である。秦の亂を避けるために、山に引きこもって謹んで修行した結果、玉帝に神霄副帥に封じられた。その後、天師張道陵が仙丹を煉るのを守っていたことから正一玄壇元帥に封じられた。訴訟や商賣に關して常に公平であることが知られ、祈れば必ず應えてくれる。[18]ここでは、趙元帥はとにかく公平な神として讃えられているが、財神として知られたのは『封神演義』の影響を受けている。『封神演義』では、趙公明が「迎祥納福、追逃捕亡」[19]の神として封じられたことから、財を司る神として廣く知られる様になった。最後に、關羽に關する研究は枚擧に暇がないが、特に財神として祀られているのは、關羽が義にあつく、俠氣に富んでいる上に金錢にも淡泊であったことから、祈れば必ず願いを叶えてくれるだろうというわけで財神にされている。[20]

二・一、都市の守護神―城隍神

城隍神の起源は定かではないが、南北朝の末期には既に史料に見えており、唐代になると、江南地方を中心に都市の守護神として盛んに信仰される様になった。宋代

以降、城隍神は地域全體の守護神として位置づけられ、地方官と表裏をなす神として重視される様になった。そして、明代初期には城隍神が國家によって制度化され、都には都城隍神を置き、各地方には地域の城隍神としての廟を建てた。これによって、城隍神はまるで冥界の地方官のような存在となった。國家としての祭祀對象からしばしば排除される（人神として城隍神になった場合）こともあったが、州・縣レベルでの祭祀は絶えずに行われてきた。城隍神に關する記録は正史や筆記史料に散見しているが、特に秦蕙田の『五禮通考』[22]に附録された「城隍」の記載は、城隍神の由來や信仰、史料上の記述などがかなり詳細にまとめられている。

では、會館の中で城隍神がどの様に祀られているかについて考察したい。『閩中會館志』に記載されている福建の諸會館には、主に三つの祭祀パターンがある。一つは、會館名と城隍神が一致するものである。例えば、福州會館には長樂城隍神位・泉郡會館には泉州府城隍神位・同安會館には同安城隍神位を祀られているのはそれに屬する物である。もう一つは、福清會館には本邑城隍神位・龍巖會館には城隍尊神位の様に、地名ではなく本邑・尊神と稱するものである。また、一つの會館で複數の城隍神が祀られていることもある。例えば、邵武郡館には敕封邵武縣城隍侯王神位・敕封太寧縣城隍侯王神位・敕封邵武府訓順侯王神位・敕封建寧縣城隍侯王神位・敕封光澤縣城隍侯王神位と五つの城隍神が祀られている。次に、具體的な祭祀方法として、管理人は祀りの日が近づくと事前に供え物を用意し、北京にいる同鄕人たちに知らせた上で、祭祀する日になると皆で祭禮を行うのが一般的である。[23]また、前述の様に祭祀が終わると宴會が開かれるが、十五歲未滿及び正裝でない人や奴隷・賤役は參加できないと規定している會館もある。[24]これは禮儀上で神を尊重する爲の措置であると考えられる。そして、祭祀の時期としては、毎月の朔日と望日に、神龕或いは神牌の前に供え物を用意するほか、年末年始には盛大な祭祀が行われる。稀だが、福建漳郡會館では「城隍尊誕」を祀る日も設けている。[25]

以上、城隍神の由來と會館での祭祀狀況について述べた。城隍神は城の安全を守る神として知られているが故に、會館という建物の中で祀る意味も明瞭である。また、城隍神は幽冥を司る冥界の裁判官とされているので、會館で祀ることによって同鄕人間の結束を高める效果があると考えられる。

二・二、親民の神―土地神

現在の土地神は中國社會において最も地位の低い神とされているが、庶民の間で最も親しまれている神でもある。土地神は中國元來の土地信仰から發生した神として、元々は農業の守護神である「后土」に由來すると考えられる。[26] 三國時代になると、土地神崇拜は人格を取り入れるようになり、生前特に優れた官僚や學者が死後に土地神となることが多く語られる樣になった。ちなみに、土地神の誕生日は二月二日とされていて、[27] 土地神の誕生日になると、家々の人々が神像の前に供え物を置き、家族の安全や亡くなった先祖があの世で安らかに過ごせる樣に祈るのである。また、像その物を祀るだけでなく、土地祠や土地廟などの建築物も設ける樣になった。土地神も城隍神と同樣に、後に道敎の神として取り込まれていくが、土地神は城隍神の部下として扱われている。そして、土地神は一家や一村の守護神として、決まった區域から離れてはいけないことになっている。これは土地神が人々の行いを監視し、城隍神に報告する責務があるからである。つまり、土地神は必ず決まった範圍内から離れてはいけないため、北京にある會館の中で地元の土地神の神位を置くことによって、土地神がその場所での滯在を可能にしたのである。從って、會館と關わっている同鄕人の行いを監視することができ、結束效果を果たしていると考えられる。

石田憲司氏は、自分たちの村落生活と關わる範圍で、大地の上に廣がる一定の空間を切り取り、この生活空間を土地と認識し、この土地を見守る神が土地神である。從って、土地神は集落を基盤とする人々の精神的な據り所として、平安な日常生活と順調な農耕を見守る神でも

あった。一方で、城隍神の直屬する行政官として、管轄區域の人々の行狀を調べて城隍神に報告し、人々の生死を司り、また財務を掌握すると傳えられると述べている。[28] この様に、土地神は徐々に土地鎭守・經濟・幽冥の官へと定着していった。

では、會館の中で土地神がどの様に祀られているかについて考察したい。基本的に土地神は土地神としての神龕或いは神牌が設けられているが、稀に土地神と城隍神を合體して祀る會館も見られる。例えば、福建の晉江邑館では「泉州府晉江縣城隍土地尊神位[29]」として一つの神位にして祀っている。また、神位や神牌を祀る場合、一つの建物の中にそれらの神々を神龕の中に竝べて置くことが一般的だが、[30] その際は置く位置によって序列をつけることができる。そして、一つの場所で神像を祀る場合には、通常、眞ん中に最も尊ばれる神が置かれ、兩側には他の神を配祀することが一般的である。一方で、數箇所に分けて其々を祀る場合もある。例えば、福州會館の場合、中院には葉文忠夫婦[31]の塑像、西院には長樂城隍神、東院には福德尊神が祀られている[32]のがその一例である。

以上、中國の民間信仰としての土地神信仰と道敎における土地神の位置づけ、そして會館での祭祀狀況について述べた。土地信仰は中國社會において最も古い信仰の一つとして、政治・軍事的な要素も度々加わり、民間信仰のみならず政治上の意味合いも込められていることがあると考えられる。また、會館で土地神を祭祀するのは、上述以外にもう一つ重要な役割がある。それは、北京で亡くなった同鄕人の魂が輪廻轉生できるよう、出身地の土地神が必要だった。亡くなった人にとって、必ずしもその遺體がすぐに故鄕に戻れるとは限らないため、一時的または長時間の遺體安置の場として、會館組織は義園という施設を設けた。その義園の中にも出身地の土地神が祀られている。會館組織における義園の役割や機能について、今後稿を改めたい。

二・三、學業成就を守る神―文昌神

文昌神また文昌帝君とも呼ばれ、今回取り上げた神々

寫眞1. 神戸關帝廟に祀られている福德正神像
※2023年11月12日、筆者撮影

の中で、最も複雑な神である。元來なら文昌というのは中國の星崇拜の一つであるが、宋代から四川省の梓潼縣より發生した梓潼神張惡子と合體し、現在の文昌帝君へと發展した。窪氏は、文昌帝君は道敎の神といいながら、かなり儒敎的な色彩が濃く、祀りにも官祭的傾向が强かったと指摘している。[33] 文昌帝君の由來とその發展について、陸燿[34]の「文昌祠說[35]」が最も詳しい。しかし、陸燿自身は文昌神の崇拜に對して反對的な立場にあり、特に學宮で文昌神を祀ることに反感を抱いていることが窺える。[36] また、文昌神は淫祀であると唱える人もいる。[37] この様に、文昌神の崇拜に關しては意見が二分化されている。そして、文昌帝君という稱號は、元代延祐三年（一三一六）第一回の科擧試驗が行われた際に、「輔元開化文昌祠祿宏仁帝君」という稱號を封じたことから由來する。[38] 明清時代には、何度か淫祀として取り締まられていたが、嘉慶五年の白蓮敎の反亂で、偶然にも反亂軍が四川の梓潼祠で破られたことがあり、その功績を稱えるために祀典に加えられた。[39] それ以來、文昌帝君の地位が確立され、

今日に至った。文昌神の評價はさておき、民間において學業の神として根強く信仰されていて、未だに受驗の時期になると文昌神を祀る風習が見られる。

さて、會館の中で文昌神はどの様に祀られているかについて考察したい。『閩中會舘志』に記されている二十二ヶ所の福建會館のうち、文昌帝君を祀っているのは、泉郡會館・晉江會館・同安會館・龍巖會館・莆陽會館の五ヶ所のみ。そして、莆陽會館には文昌像を、泉郡會館と晉江會館には「五文昌夫子」の神位を、同安會館と龍巖會館には文昌帝君神位を祀っている。李景銘は、「文昌」に關わる呼稱（文昌神・文昌帝君・五文昌・夫子など）について、その歴史や由來が未だよく分からないと指摘する上で、いずれにしても恐らく人々に善行を行うよう勸めるものに違いないと主張した。そして、「五文昌夫子」の「夫子」というのは、「文昌帝君陰騭文」に文昌は十七回生まれ變わっており、全て士大夫だと記していることから「夫子」となったと推測される。更に、「五文昌」というのは人鬼としての張仲、張良、呂光、孟昶、張惡子の五鬼か、或いは天神の五官から由來するが、會館で祀っている「五文昌」は天神としての物で、人鬼ではないと推測されている。[40] この「五文昌」について、窪氏は、關帝・呂洞賓・朱衣帝や北斗の魁星とあわせて五文昌、または五文昌帝君とよび、未だに臺灣で多くの人々から信仰されていると述べている。[41]

以上、文昌神の由來や會館での祭祀狀況ついて考察した。上述の様に、確かに文昌神は廣く民間信仰として知られているが、文化知識人の間ではあまり信仰されていない様に思われる。これは、文昌神が學業の神として庶民によって崇拜される一方で、官僚や知識人の中では學問や實績による自己の能力や努力を重視する傾向があるからだと考えられる。

二・四、會館の創立者及び先賢

ここで一轉して、宗教神から離れ、會館の中で祭祀されている人物について考察したい。前述の様に、會館の中にはその創立者や鄉賢も祭祀されている。これは同鄉

人間の結束としての機能も兼ねているので、會館組織にとっては、必要な祭祀對象である。例えば、前述の福州・福清兩會館には葉文忠が祀られているが、それも神牌ではなく、像を祀っている。特に福州會館には葉文忠夫婦の像が祀られており、像の高さは二尺あまりで、夫人の方には禮服を着ており（纏足している）、左右兩側に男女の使用人も設けられている。[42] 管見の限り、北京ではこれほど豪華な人物像を會館で祀っているのはここだけである。ほかにも泉郡・安溪兩會館には李文貞[43]が祀られている。李文貞は安溪會館の創立者とされており、他にも詹咫亭[44]と官石谿[45]も併せ祀られている。[46] 李景銘氏が調査した當時、泉郡會館の中で、なお祭祀が行われていた。その記録を以下に記す。

館中第三院有一大神龕、內祀各神位。大仙爺神位・福德正神位・大學士李文貞先生神位・五文昌夫子神位・泉州府城隍神位、今神位俱存、住館者以紫呢捲幔圍之、致祭時捲幔上香、祭畢仍垂幔以蔽、較諸福清會館、以竹屏蔽者、稍爲得法、但以大仙爺神位、與文貞先生光地神位竝列、似不合宜。[47]

會館の第三院には一つ大きな神龕があって、中には各神位が祀られている。大仙爺神位・福德正神位・大學士李文貞先生神位・五文昌夫子神位・泉州府城隍神位、今でもこれらの神位が保管されており、會館の管理人が紫色の織物で圍んでいて、祭る際にはその織物を開けて線香をたて、祭った後には再び蔽う、福清の他の諸會館の、竹で蔽うのと比べると、多少適切であるが、しかし大仙爺神位と、文貞先生光地神位を一緒に竝べるのは、宜しくないであろう。

以上、李景銘氏の調査記録を見ても、確かに神位がまとめて置いてあり、祀る際にはまとめて併せ祀られていたことが窺える。ここは、李氏が指摘する様に、大仙爺と會館の創立者を同じ場所に安置して祀るのは妥當性が缺けている様に思われる。大仙爺は俗に狐仙といい、妖怪に屬するものであるから、普通に考えれば會館で祀る

ようなものではない。まして會館の創立者や土地神と共に祀っているのは違和感がある。ただ、李氏の調査は一九四二年に行われたもので、當時の中國情勢を鑑みれば、祭祀自體が續けられていただけでも盡力したといえるだろう。他にも、邵武郡館の西にある神堂では、理學者の嚴羽[48]・李方子[49]・劉剛中[50]の他、會館建設に盡力した諸先生や會館の創立の諸先生・會館で亡くなった人・北京で亡くなった諸先生も併せ祀られている[51]。

以上、會館の中で祀られている人物神について述べてきた。士人會館だからこそ多くの同郷官僚や郷賢を祀る必要性があった。それは、同郷官僚や郷賢を祀ることによって、同郷人としての結束を高めることができるし、故郷の優れた人物や會館建設に貢獻した人を讃えることで、同郷人としてのモチベーションも高めることができると考えられたからである。そもそも、士人會館の主な機能は北京に赴く科擧試子のために宿泊を提供することである。地元の先賢や有名な官僚を祀ることで、今から官僚界へ入ろうと志望する科擧試子にとっては非常にいい刺激を與えていたに違いない。

おわりに

以上、本稿は主に北京にある士人會館をもとに、神を祭祀する意義及びその對象について考察した。士人會館は身分を問わず、同郷人であれば利用することができるので、如何に同郷人を結束するかは、會館の運營・維持する上で最も重要なこととなっている。そこで、地元神を祭祀することによって、會館の秩序が保たれ、同郷人としての結束を再確認し、祭祀行事後の親睦會の開催によって、親睦を深めることも出來た。また、會館の創立者や出身地の郷賢を祀ることで、同郷人意識がより一層向上・團結することが出來た。この様に、會館で神を祭祀する背景には、宗教の民衆化や科擧制度の推進・北京遷都などと深く關わっており、これらのことに關しては今後更なる研究が必要である。また、本稿ではあまり觸れていなかったが、會館における祭祀活動はしばしば劇の上演と共に行われることがある。この様な祭祀演劇に

關しては、既に田仲氏による詳細な研究成果[32]が出ており、ここでは詳しく論じない。そして、北京における商・工人會館や北京以外の各地域における會館での祭祀狀況や會館における義園の機能と役割、更に十王信仰・城隍神信仰といった信仰問題については、今後の課題としたい。

注

（1）　田仲一成「清代の會館演劇について」（『東洋文化研究所紀要』第八十六册、昭和五十六年）四〇四頁。のち、田仲一成『中國演劇史論』（知泉書館、二〇二一年）第六章・第三節に收錄。

（2）　同上、第四〇九頁。

（3）　劉曄原、鄭惠堅『中國古代的祭祀』（商務印書館、一九九六年）六～一〇頁。

（4）　北京にある歙縣會館に關する研究は少なく、管見の限りでは、寺田隆信著、潘宏立譯「关于北京歙縣會館」（『中國社會經濟史研究』第一期、一九九一年）、張冠增「明末清初北京の歙縣會館―徽州商人とその同鄕組織―」（三鷹：國際基督教大學・アジア文化研究、一九號、一九九三年）、皱怡「善慾何爲：明清時期北京歙縣會館研究（一五六〇―一八三四）」（『史林』第五期、二〇一五年）、拙稿「北京歙縣會館に關する一考察―『重續歙縣會館錄』をもとに―」（『人文論究』第七〇卷、第1號、二〇二〇年）の四點のみである。

（5）　『道光　重續歙縣會館錄』（大東圖書公司印行、一九七七年）

（6）　同上、乾隆六年會館公議條規、三一頁下。

（7）　同上、續錄原例「會館及義莊、自經始以來、所費不貲、合邑同人、捐貲輸助、此公義也。」一二頁下。

（8）　同上、乾隆六年會館公議條規「會館擇在京殷實老成、有店業者、分班公管、每年二人輪流復始、其公匣契紙、銀兩竝收支會簿、上下手算清交代。（後略）」三一頁上。

（9）　『京都績溪館錄』卷一・（道光六年）規條「每年正月十三日、上鐙恭祀衆神。」（王日根・薛鵬志編纂『中國會館志資料集成（第一輯）』第二册、厦門大學出版社、二〇一三年に所收。）

（10）　同上「館事以京職一人經理、鄕會留京者二人協理、圖分前後、一年一換、定于正月十三日、新舊交代、新班務將舊班經手收支帳目算清、不得含混、如有虧短卽集衆理論、若新班徇隱、接收所虧之項、卽令賠償、其交代帳目、竝於是日開一清單、粘貼於壁、聽衆查覈。」

（11）　『北平涇縣會館錄』卷一・光緒丁丑年重議館規「値年交接仍照向章、以一年爲期、嗣後每年二月初三日文昌誕辰、在京同鄕齊集新館、由本値將一年收支細賬結出簡明

數目、交下值接收、隨卽刊入館錄、以備稽查、幷拈定下屆值管一位。」（北京市檔案館編『北京會館檔案史料』北京出版社、一九九七年に所收。）二八七頁。

（12）　李景銘編『閩中會舘志』龍溪會館・原定規約「每歲上元日、虔備牲醴、致祀先賢、每位各出分金、不足則參支公項、祭畢、享餕館值、卽於是日、將一年收支帳目、開出粘壁、以示無私、如輸值亦於是日交代。」（中國國家圖書館藏、民國三十二年鉛印本）

（13）　『漳郡會館錄』卷首・會館規約「春秋祭本郡城隍之神、春以上元、秋以中秋、館長、副公辦香燭、牲醴、先期請知館友、如期行禮、館長主獻祭、畢會飲、以齒爲序、食取胙餘、不至豐、飲取獻酹、不及亂、其五月十一日、祝神誕、係今新增禮、亦如之。」（王日根・薛鵬志編纂、前揭書、第五册）

（14）　李家瑞編『北平風俗類徵』宴集・迎狀元「凡得鼎甲省分、是日同鄉京官、開會館、設讌演戲、徧請以前各科鼎甲、迎新狀元、其榜眼探花亦如之。鼎甲傳臚、用大紅長條貼門、與得試差同。」（『民國叢書』第五編：二二：社會科學總論類、上海書店、一九九六年）

（15）　神判・冥界裁判に關する研究が多く、私に特に參考となったのは、澤田瑞穗『地獄變：中國の冥界說』（法藏館、一九七六年）、仁井田陞『補訂　中國法制史研究・刑法』（東京大學出版會、一九八〇年）、劉黎明『契約・神裁・打賭：中國民間習慣法習俗』（四川人民出版社、一九九三年）、鄭土有・王賢淼『中國城隍信仰』（上海三聯書店、一九九四年）、水越知「明淸時代の祠廟信仰と佛敎―城隍神の冥界裁判を中心に」（吉田一彦編『神佛融合の東アジア史』名古屋大學出版會、二〇二一年）などである。

（16）　『閩中會舘志』について、拙稿「『閩中會舘志』所載の明代創建の諸會館について―明淸交代後の會館再建を中心に―」（『人文論究』卷七一、第三號、二〇二一年）を參照。

（17）　『搜神記』卷六・增福相公「李相公諱詭祖、在魏文帝朝治相府事、白日管陽間、決斷邦國寃滯不平之事、夜判陰府是非、狂錯文案、兼管隨朝三品以上官人衣飮祿料、及在世居民每歲分定、合有衣食之祿、至後唐明宗天成元年（九二六）贈爲增福相公。」（『道藏』第三六册、文物出版社／上海書店／天津古籍出版社、一九八八年に所收。）

（18）　『繪圖三敎源流搜神大全（外二種）』趙元帥「姓趙、諱公明、鐘南山人也。自秦時避世山中、精脩至道、功成、欽奉玉帝旨、召爲神霄副帥。（略）昔漢祖天師脩煉仙丹、龍神奏帝、請威猛神吏爲之守護、由是元帥上奉玉旨授正一玄壇元帥。（略）至如訟寃伸抑、公能使之解釋公平、買賣求財、公能使之宜利和合、但有公平之事、可以對神

禱、無不如意。」（上海古籍出版社、一九九〇年）一四二～一四三頁。

(19) 許仲琳編『封神演義』第九十九回・姜子牙歸國封神「子牙曰：『今奉上原始敕命：（略）特敕封爾爲金龍如意正一龍虎玄壇眞君之神、率領都下四位正神、迎祥納福、追逃捕亡。爾其欽哉！（略）』」（人民文學出版社、一九七三年）一〇〇五頁。

(20) 窪德忠『道教の神々』（講談社、二〇一五年）二二〇頁。

(21) 『清史稿』卷三百四・列傳九十一「秦蕙田、字樹峯、江南金匱人。祖松齡、順治十二年進士、官左春坊左諭德。（中略）蕙田通經能文章、尤精於三禮、撰五禮通考、首採經史、次及諸家傳説儒先所未能決者、疏通證明、使後儒有所折衷。」（中華書局、一九七六年）

(22) 秦蕙田『五禮通考』卷四十五・吉禮四十五・社稷城隆附（『影印文淵閣四庫全書』第一三五冊・經部一二九禮類に所收。）なお、『五禮通考』は秦氏味經窩初印本・乾隆本・『四庫全書』本・光緒六年（一八八〇）江蘇書局本・光緒二十二年（一八九六）湖南新化三味堂本、等の版本がある。また、城隍神に關する記載が少々長く、本稿ではその詳細な内容については割愛する。

(23) 『閩中會舘志』州館・龍巖會館・（乾隆年）規約「每歲神誕、公備香燭牲醴致祭、先期佈告、至期行禮。」

(24) 『京都績溪館錄』卷一・（道光六年）規條「每次祭畢散福、每席酌用京錢貳吊貳百文、不得多費、同鄉年十五以上者、均衣冠齋集拜祭、儻年未十五及不衣冠者、不許入席散福。（凡爲優隸賤役之流、亦不許入席。）」（王日根・薛鵬志編纂、前掲書）

(25) 『漳郡會館錄』卷首・祭祀事宜儀注祝文「五月十一日、祭東館城隍尊誕」（王日根・薛鵬志編纂、前掲書、第五冊）

(26) E・シャヴァンヌ著：菊地章太譯注『古代中國の社：土地神信仰成立史』（平凡社、二〇一八年）

(27) 顧祿撰、王稼句點校『清嘉錄』卷二・二月・土地公公生日「二月爲土地神誕、俗稱土地公公、大小官廨皆有其祠。」（中華書局、二〇〇八年）六八頁。

(28) 石田憲司「土地の神々―后土・土地神・城隍神」（野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』大修館書店、二〇〇四年）三〇―三一頁。

(29) 『閩中會舘志』縣館・晉江邑館・古物二・神像神牌

(30) 同上、府館・泉郡會館・古物四・神牌「館中第三院有一大神龕、內祀各神位。」

(31) 『明史』卷二百四十・列傳第一百二十八「葉向高、字進卿、福清人。父朝榮、養利知州。向高甫妊、母避倭難、生道旁敗厠中。數瀕死、輒有神相之。舉萬曆十一年（一五八三）進士、授庶吉士、進編修。遷南京國子司業、改

左中允、仍視司業事。（略）熹宗崩、向高亦以是月卒、年六十有九。崇禎（一六二八～一六四四）初、贈太師、謚文忠。」（中華書局、一九七四年）

(32)　『閩中會館志』福州會館・古物九・神像及鐵五供「館內中院、祀葉文忠夫婦塑像、高二尺餘、文忠夫人、穿霞帔繡鞋、可見明朝婦女、仍尚纏足、侍從兩列、男女各一。西院燕譽堂後三楹、祀長樂城隍神位、東院卽景福堂、祀福德尊神、卽俗所稱土地公。」

(33)　窪德忠、前揭書、一六七頁。

(34)　『清史稿』卷三百二十四・列傳一百十一・陸燿「陸燿、字青來、江南吳江人。乾隆十七年擧人。」

(35)　陸燿『文昌祠說』（沈雲龍主編『近代中國史料叢刊』第七十四輯、文海出版社、一九六六年に所收。）

(36)　同上、「文昌之祠遂徧天下、尊之曰帝君、甚而闌入學宮焉。士稱讀書明理、皆灼然知其非禮、往往因爲碑記之文、而昌言排之。」

(37)　陳其元『庸閑齋筆記』卷六・文昌爲淫祀「今文昌之祀、遍天下矣、隆重幾與文廟等、然或謂爲星辰、或指爲人神、究莫能明也。（略）時漳浦有紳士、乃建閣于學宮而祀之、蔡封翁止之不得、遂控于官府、皆不勝、忿而控部、部議以文昌之神不見經傳、誠爲淫祀、行文禁止。」（錢泳等編『筆記小說大觀』第二十一冊、江蘇廣陵古籍刻印社出版、一九八三年に所收。）

(38)　森田憲司「文昌帝君の成立」（梅原郁編『中國近世の都市と文化』京都大學人文科學研究所、一九八四年に所收。）四一〇頁。

(39)　『清史稿』卷八十四・志五十九・禮三・吉禮三「文昌帝君、明成化間、因元祠重建。在京師地安門外、久圮。嘉慶五年（一八〇〇）、憧江寇平、初寇闖梓潼、望見祠山旗幟、慾退。至是御書「化成耆定」額、用彰異績。發中帑重新祠宇、明年夏告成、仁宗躬謁九拜、詔稱：「帝君主持文運、崇聖闢邪、海內尊奉、與關帝同、允宜列祀典。」

(40)　『閩中會館志』府館・泉郡會館・軼聞遺事條「該館祀五文昌夫子神位、始不解五文昌之歷史、又不解何以稱之爲夫子、而徧查別館、有逕稱文昌君者、或稱文昌帝君、尤覺迷離恍惚不知究竟、詢諸友人、但云陰騭文內、文昌君自言、十七世爲士大夫、無非勸人爲善意。（略）然何以加以五文昌之稱乎、既曰五文昌矣、必指人鬼言、既指張仲、張良、呂光、孟昶、張惡子五鬼也。（略）執天神之說者、其所謂五文昌、卽指天之五官言、天子有祭天之義、故祀文昌亦親臨謁、若以五鬼言、何勞玉駕之親臨乎、會館之祀五文昌、其指天神非人鬼、可以證矣。」

(41)　窪德忠、前揭書、一六八頁。

(42)　前揭注三二を參照。

(43)　『清史稿』卷二百六十二・列傳四十九・李光地「李光

地、字晉卿、福建安溪人。幼穎異。年十三、擧家陷山賊中、得脫歸。力學慕古。康熙九年成進士、選庶吉士、授編修。（略）五十七年、卒、年七十七、遣恆親王允祺奠醊、賜金千兩、謚文貞。」

(44) 『明史』巻二百十五・列傳第一百三「詹仰庇、字汝欽、安溪人。嘉靖四十四年進士。」

(45) 『清史稿』巻四百八十・列傳二百六十七・儒林一・官獻瑤「官獻瑤、字瑜卿、安溪人。執業於漳浦蔡世遠、桐城方苞、稱高足弟子。（略）乾隆四年進士、選庶吉士、充三禮館纂修、授編修。」

(46) 『閩中會舘志』縣館・安溪會館・古物二・神位「該館原祀創館人李文貞公、及詹咫亭・官石谿二先生神位。」

(47) 同上、府館・泉郡會館・四　神牌

(48) 『嘉靖邵武府志』巻之十四・隱士「嚴羽、字丹丘、一字儀卿、邵武莒溪人也。粹溫中有奇氣、當問學於包克堂自風騷而下講究精到石屏戴復古深所推敬、自號滄浪逋客、有滄浪集二卷行世。」（『天一閣藏明代方志選刊（三十）』上海古籍書店、一九六四年に所收。）

(49) 『宋史』巻四百三十・列傳第一百八十九・道學四「李方子、字公晦、紹武人。少博學能文、爲人端謹純篤。」（中華書局、一九七七年）

(50) 『嘉靖邵武府志』巻之十三・鄉賢・宋「劉剛中、字德言、建寧人。自少慷慨力學、好爲文、凡應酬之事、遊翫之樂、悉於文發之、讀莊・老・荀・楊之書、辭義有契于心、每事爲之贊。」

(51) 『閩中會舘志』府館・邵武郡館・古物四・神位及木主「其西神堂、則附祀左列各木主、宋風雅宗匠滄浪嚴公諱羽老先生神位・宋理學名儒果齋李公諱方子老先生神位・宋理學名儒德言劉諱剛中先生神位・國朝修闢本館諸先生神位・明始創建本館諸先生神位・建館以來凡有在館中物故諸先生之位・本郡在京已故諸公之神位」

(52) 田仲一成の研究成果として、『中國祭祀演劇研究』（東京大學出版會、一九八一年）、『中國の宗族と演劇』（東京大學出版會、一九八五年）、『中國鄉村祭祀研究―地方劇の環境』）（東京大學出版會、一九八九年）、『中國巫系演劇研究』（東京大學出版會、一九九三年）等がある。なお、本稿と關連深い研究として、『中國演劇史』第七章（東京大學出版會、一九九八年）、『中國演劇史論』第六章（知泉書館、二〇二一年）等がある。

会馆中祭祀神明的意义及对象－以北京士人会馆为中心的考察

张　九龙

笔者的研究主题是北京的会馆。在研究会馆组织的过程中笔者注意到，在会馆中总是频繁的出现关于祭祀神明的记载。一年当中至少有 2 次大的祭祀以及不定时或定时举行的小的祭祀。于是我便想，为什么要在会馆中祭祀神明，其意义是什么？我便抱着这种念头，开始着手调查会馆中的祭祀行为。

会馆组织本身是为在京同乡官僚提供便利的组织，最早是明代永乐年间在北京出现的。但是随着时代的变迁，会馆组织本身也随之被赋予了多种功能。比如早期的会馆组织是以官僚为中心，其功能则是专为公车上书而服务。到明代中后期商人开始涉足北京会馆的建设中来，至清康熙年间会馆组织已经发展成为官、商、工共同经营管理的社会组织。当然，官僚和商工会馆之间还是存在很多不同之处的。比如，以官僚为主的士人会馆的祭祀对象往往是国家承认的主流神明（城隍神、土地神等），而以商、工人为主的会馆则更多的是祭祀与其职业相关的神（金银业供奉财神、油业供奉火神等）。再有，官僚士人会馆注重季节祭（春祭、秋祭），而商、工人会馆则是更注重神诞日。

就目前的研究情况来看，有很多是涉及到会馆祭祀的。但是就如上述一般，会馆的构成人员不同也直接导致其所祭祀的对象也会不同，在现有的大部分研究中很少有能把所有类型会馆都囊括的研究。本文尝试以官僚士人会馆为中心，将北京的不同类型的会馆中所祭祀的各种神明进行一个整体的概括论述。当然要想做全面的研究单靠一篇文章是远远不够的，所以本文想通过会馆中所祭祀的几个典型神明以及其在会馆中祭祀的意义为切入点，对北京会馆组织中存在的祭祀行为做一个整体的梳理。今后会通过更多的具体示例对北京会馆中存在的祭祀做一些更具体的分析。